

BOOK REVIEW

ヒトの一生の生理学 生から死まで 富田 忠雄, 長 琢朗, 瓦林達比古 著 九州大学出版会

鯉淵 典之 (群馬大学大学院医学系研究科 応用生理学分野)

本書は受精に始まり死に至るまでのヒトに生じる一連の現象を、生理学を中心とした観点から解説している。

学生や他分野の研究者にとって、生理学の教科書・参考書というと膨大で多岐にわたり、わけのわからない数式や複雑なシステムの解説が続く難解な書籍というイメージが付きまとうようだ。なぜ、そのようなイメージが定着してしまったのか？それは実際に教科書の執筆にあたる我々の側にも責任がないだろうか？また、生理学の本質は、ヒト全体を「個体」としてとらえ、細胞、臓器など異なる階層ごとのシステムがどのように個体の生命活動維持にかかわっているのかを「統合的」に理解する、という事であるが、現存する教科書はこの目的に合致するように作られているのだろうか？

「統合」は生理学者が共有すべき概念であるにも関わらず、多くの研究者は自分の興味ある分野以外は無関心となる傾向がある。自分の専門分野には驚嘆すべき関心と熱意を示すが、興味の範囲外の研究に対しては傍観者となる状況は日常的に見られる。これらの研究者が集まり、教科書を執筆した結果、神経・循環・呼吸・内分泌などの各生体システム、もしくは発生・発達・生殖・老化など一つ一つの生命イベントが独立したオムニバス形式でまとめられることとなり、各イベントの詳細な解説書の色が濃くなる。「ヒト個体」や「ヒトの一生」を統合的に解説する項目を設けた教科書は限られているし、執筆が可能なほど全てのシステムに精通した生理学者も限られている。特定



の分野に興味を持ち、研究する研究者・大学院生、また、決められた試験範囲を履修して試験に臨む医学生などにとってはこのような教科書も十分意味がある。しかし、「ヒト個体の全体像の把握」という目的には到底使うことはできないし、専門家以外には「厄介な書物」ともなりかねない。コンパクトなサイズで、特定の専門に偏ることなく、統合的に生命現象を解説し、生理学の初学者や、教養教育に用いることができる「生理学入門書」と呼べる書籍は意外と少ない。

本書は約 130 ページと比較的短く、一気に通読することも可能である。そのため、ヒト一生の生理的变化の全体像を容易に捉えることができる。ヒト一生の各ステージにおける生命現象は、時の流れというタテのラインに基づき内容が整理され、生理学と臨床医学の知見をベースにしながらも、特定のシステムやイベントに偏ることなく統

合的見地から解説されている。また、延命治療や脳死判定などの倫理的な問題に対する議論も提起されている。誰もが通過するヒトの一生という時間の流れを辿りながら、生理学的な解説に留まらず、倫理的問題まで踏み込むことで、読者は本書で扱っている生命現象が自分自身の問題であることを感じ取ることできる。

本書は生理学の教科書というよりは、医学・医療系学部の初年次における医学概論や生命科学入

門といった科目の入門書として適しているように感じる。一方、各専門分野の研究者は、生理学全体の中での自己の研究分野の位置付けや周囲の学際領域との相互関係を確認するために活用できる。

本書を通して、一人でも多くの学生・研究者が生理学に対する関心を新たにすることを願っている。